

重点取組分野	令和 元 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きて働く知	①学校生活では高学年の行動を、授業場面ではよい考えをモデルにするように努め、子どもの自己決定の指標を明確化する。結果にとらわれず過程を評価する指導法を定着させる。②授業研究会を核にして授業力向上に努め、「主体的・対話的で深い学び」を実現する指導力を身に付ける。	①全教師の授業場面を観察し、適宜、指導・助言を行った結果、徐々に児童主体の授業の在り方について浸透し始めた。また、全教師の教師主導型の固定授業観を払拭できていない。②公開授業で客観的な意見を得た。児童が主体となる「主体的・対話的で深い学び」への礎は整った。	B
豊かな心	①朝会や集会等の場で定期的に「人のかかわり」について全校児童に話題提供する。また、トラブルの原因となるSNSの存在・使用法等について保護者の意識改善を啓発する。②生活科・総合的な学習を中心に「ひと」との出会いを学習過程に組み込み、他者から学ぶ場面を増やす。	①児童の意識改善については、学校教育目標の「な」に相当する資質・能力「かかわりあう力」の意識化に向けて教職員に言葉をかけ続けた結果、児童の関わる姿が多くみられるようになってきた。②教科書に頼らず、児童の実態に即して自身で単元を創造できる教師が増えてきた。	B
健やかな体	①体力テストの結果を活用しながら、委員会活動等から児童主体の取組を奨励し「長なわ集会」等の全校で行う取組を定期的実施する。②学校保健委員会で取り上げるテーマについて、子どもの生活に即した課題を設定し、実生活で活かせる内容として位置付ける。	①長なわ集会に加え、持久走週間を設けて取り組んだ結果、休み時間に積極的に校庭で遊ぶ児童が増えている。②学校保健委員会では、養護教諭の活躍もあり、感染症防止意識を高めた。児童の必要感に始まる取組が実現し、学校医からも褒めの言葉をいただいた。	A
地域との協働	①地域祭礼や行事に職員が積極的に参加する姿勢を示すほか、学校運営協議会を通して今日的な課題を共有し、地域と学校との双方向の理解を深め、さらなる協力体制を築く。②地域人材に依頼して学習場面に積極的に参加してもらえ体制を確立し、まちぐるみで児童を育てる。	①地域祭礼では、複数学年が積極的に取り組んだこともあり、本校児童の多くが参加するようになり、地域からの高い評価を得た。②地域人材の開発は進み、学習に参加してもらう機会は増えたが、想定した内容までは至っていない。次年度の内容を具体的に編成したい。	B
児童理解・児童指導	①職員会議等を活用し、全職員が児童の特性や課題を共有し、個に応じた適切な指導を一本化するに努める。②学校だよりや学校説明会、懇談会などの機会を活用して、保護者に学校の目指す教育的価値を積極的に発信する。	①409名の児童をほほすべての職員が情報共有して指導にあたった。次年度はより児童の特性を理解した適切な指導を目指す。②学校説明会、学校だより、PTA行事で、本校の目指す教育像を説明し具体的な取組を示した。一定の理解を得られている。	A
幼保小連携	①近隣幼稚園・保育園との授業参観を双方向で行い、接続が円滑に進むように情報を共有し、交流会を設定する。また、その取組について幼保小連携事業を活用して具体的に発信する。②幼児教育機関に学校側が出向き、学校の教育方針を説明するとともに、入学後の安心を構築する。	①関連行事を増やし、近隣幼児教育機関との連携を強化した。交流会では1・2年担任を中心に幼児理解を図り、教師の交流も進んだ。②幼児教育機関にて保護者向けスタートカリキュラム講演を行った。質問からも高い関心がうかがえた。より垣根を低く進めていきたい。	B
行事の見直し	①学校教育目標の「見える化」を図り、変更する行事等の意図について児童・保護者・地域等に対して学校教育目標との関連を示す。②見直し後初めて実施する体験学習、遠足等の行事を学校教育目標に照らし、次年度への具体的な修正箇所を検証する。また、次年度以降の計画を具体化する。	①学校教育目標と重点研究の相互関係を「見える化」し、ほとんどの教職員が学校教育目標を説明できるようになったことは画期的である。②行事を精選する意識で行ったことで、本当に必要な行事を洗い出すことに成功した。また、学校運営協議会の意見を得て、前後期制を判断した。	A
いじめへの対応	①学級担任を核に学年職員、児童支援専任と情報を綿密に共有し、きめ細やかな支援体制を整えて組織として迅速に対処する。②研修を受けた者が全職員に対していじめの兆候について発信し早期発見に努める。また、発生してしまった場合の保護者対応など、組織で入念に共通理解を図る。	①専任が4月に休職し学級担任に代行を命じたことで負担が増え、苦しい場面が多かった。しかし残った職員が奮闘し、いじめ認知も的確化し、対応力が向上した。②認知意識は向上したが、保護者対応では苦慮した。次年度は専任の機動力確保により丁寧に進めたい。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①子どもが主体的に学ぶ授業や細やかな児童理解等の指導について、また組織としての分掌について、校内研修を計画的に行い、経験の浅い職員をサポートする。②働き方改革プロジェクトチーム主導により、本校の実態に即した改革法を見出し、実施検証する。③計画年休を推奨し、見直しをもって業務を調整して休暇等を取ってほしい。	①若手の人材育成は著しい。授業力向上が進んだ。一方、中堅の人材育成はあまり進まなかった。②働き方改革は進んだ。今年度の組織矛盾を徹底的に洗い出し、次年度の組織を見直した。結果は次年度に譲るが、構造の見直しをもたせた。③休職者4名の穴を埋めることができず、休暇取得は実現できなかった。	B
ブロック内評価後の気づき	中学校ブロック4校の校長が全員交代(女3男1→男4)する状況であったことをプラスと捉え1から始めることで共通理解が進んだ。それぞれが積極的に自校で育てたい子ども像を述べたうえで9年間で育てたい資質・能力を再確認し、小学校側が学校教育目標と発達段階に即して資質・能力を見直したことで、迷いなく学校教育活動を進めることができた。児童生徒交流での意見交換も活発に行うことで、児童生徒理解も進んだものと考ええる。より、情報を共有する機会を設定しながら、中学校との接続を意識した教育課程運営改善を行いたい。		
学校関係者評価	学校運営協議会も設置後3年を経過し、教育活動の内容に対してダイレクトな意見を頂戴できる有意義な機会になってきた。ここ2年、休職者が多い現状を地域の方々をはじめとした関係者に相談してきた経緯から、大胆な発想で学期制の変更(3学期制から2学期制へ)、年間行事の見直し、働き方改革を提案してきた。たくさんの意見交換を行う中で、全面的に応援していただける声を頂戴し、次年度には、その具現化を始めることに結び付いた。		

重点取組分野	令和 2 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きて働く知	①学級担任の半数強が転入者で、かつ大きく平均年齢が下がった状況に鑑み、昨年度に進めた授業改善について早い段階での浸透を図り、児童主体の授業展開を進める。②「主体的・対話的で深い学び」を表す具体的な児童の姿を共有し、学年や低中高ブロックで教師間授業観察を推進する。	①学校教育目標の「な」及び関連する中心資質・能力「かかわり合う力」の育成を推進するために、学校教育目標を各教室に掲示して共有、児童とともに付記しながら足跡を残す。②道徳科の授業改善及びベア学年活動の充実、生活科・総合的な学習を活用して他者との関わりを充実させる。	
豊かな心	①一校一実践である「長なわ」を核としながら「運動集会」の実施や運動会の在り方を含む体育科の授業改善を進め、児童が自ら運動を生活に取り込むライフスタイルの確立を目指す。②児童にとって必要感のある課題を設定し、探究型の構造をもたせることで学校保健委員会の充実を図る。	①より地域に根差した学習活動を展開する。社会科はもちろん、生活科や総合的な学習の地域材を開発し、双方向の「開かれた学校」づくりを目指す。②学校運営協議会の意見を尊重し、スクールゾーン対策協議会や地域防災拠点運営委員会と連動し、児童の体験活動の場を設定する。	
健やかな体	①半数以上の職員が入れ替わったことで、児童理解をより充実させる必要がある。情報共有を必要に応じて適宜行う。②学校と家庭での指導の方向性をより共通化するために、学校教育目標の趣旨を積極的に発信する。学校だより、保護者会等での発信機会を増やし、共通理解を図る。	①昨年度拡大した幼児教育機関との連携を強化するため、職員間相互による研修・交流の充実を図るほか、児童間の交流活動を設定する。②幼児教育機関に学校側が出向き、学校の教育方針を説明する機会を設定するほか、幼児教育機関の方針を理解し、スタートカリキュラムを充実させる。	
地域との協働	①昨年度、学校教育目標の具現化を図るための年間計画の刷新を図った。3学期制の前後期制変更に伴う行事日程や内容について、実施しながら教育効果の検証を図り、随時見直しを図る。②児童の必要感に基づく行事になっているかの検証を行いながら、運営改善を図る。		
児童理解・児童指導			
幼保小連携			
行事の見直し			
いじめへの対応			
人材育成・組織運営(働き方改革)			
ブロック内評価後の気づき	①学校生活における児童の状況を具に見取り、児童が教職員に話し掛けやすい雰囲気構築する。児童の声に耳を傾け防止に努めるほか、いじめの早期発見を確実に実行して解決を図る。②児童支援専任の対応機会を保障するため、専任の授業時数配分を見直し、即時的な対応を可能にする。		
学校関係者評価	①学級担任の平均年齢が大幅低下したことによる経験不足を補うため、ミドルリーダーがサポートする学年ブロック組織を設定し、教職員間での指導体制を充実させる。②校務分掌を劇的に変更し全員参加会議を前年度比2分の1とする。授業づくりに充当する時間を確保しつつ、学校運営上の歪がないようPDCA観点で検証する。		

重点取組分野	令和 3 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きて働く知	c1		
豊かな心	c2		
健やかな体	c3		
地域との協働	c4		
児童理解・児童指導	c5		
幼保小連携	c6		
行事の見直し	c7		
	c8		
いじめへの対応	c9		
人材育成・組織運営(働き方改革)	c10		
ブロック内評価後の気づき			
学校関係者評価			

中期取組目標振り返り
 校長元年となる今年度、副校長としてみてきたよさを活かし、課題と判断した部分の改善を図る学校運営を行ってきた。最重要課題とした授業改善については、児童の「主体的・対話的で深い学び」のおほげなイメージを職員がもつことができたのではないかと自負する。授業が変わることで児童の姿も生き生きし始めてきた。また、働き方改革については、令和2年度開始時の組織構造全面改革を目標に課題の洗い出し、新たな発想の創出に取り組んできたが、ここにきて次年度の組織構造を大胆に変更したが、よい見通しが立っており、大幅な改革が進むものと管理職として期待している。

中期取組目標振り返り

中期取組目標振り返り